

# 研究報告) ルワンダツアーで見てきた課題に関する考察 — 衛生設備、仕事、食事、衣服事情について —

## Reflections on issues revealed by the Rwanda tour-sanitation, food, work, clothing

市ノ澤音羽<sup>1)</sup>

### 抄録

ルワンダは、東アフリカに位置する温暖な気候の内陸国である。四国の約1.5倍ほどの国土に1,295万人(2020年)が住んでいる。公用語はキニアルワンダ語、フランス語、英語が使われている。歴史的分岐点は1994年にフツ族とツチ族の民族対立からジェノサイド(虐殺)が起こったことである。このジェノサイドはベルギーの統治による民族間の差別意識の高まりなどが発端とされている。約100日間の犠牲者は80~100万人にも上る。このような過去を抱えながらも、現在のルワンダは社会経済的および政治的進歩を遂げている。

私はこのルワンダツアーでの様々な経験を通して、衣食住や教育、命について考えさせられた。その中で、衛生設備、食事、衣服、仕事に対して私が抱いた問題点について、都市部と農村部の比較をした視点から考察をしたので報告する。

キーワード: ルワンダ、衣食住、衛生設備、貧困、教育、農村部

### I. 緒言

私は2022年9月3日~9月13日の10日間アフリカにあるルワンダ共和国の首都キガリに滞在した。

高校生の頃から興味があった社会問題について、自分の目で見て学ぶため、そして発展途上国で暮らす子どもたちと関わってみたい、話してみたいという思いからルワンダに渡航した。教育の場であるローカルの幼稚園、首都から離れた村やスラム街への訪問、現地の学生との交流、幼稚園やスラムを訪問して感じた衛生や食に関する問題、村を訪問して感じた衣服に関する問題、そして仕事に関する問題について、ローカルの方から聞いた話や自分が感じたことを基に記し、そこから見てきた課題について整理したい。

### II. ルワンダの衛生設備について

私は、約2週間の滞在の中で村とスラム街を訪問した。ルワンダは都市部と農村部の貧富の差がかなり大きい。ここでは、都市部と農村部で感じた大きな差であるトイレの衛生面について記していく。私は訪問した村の幼稚園とスラム街の家の衛生面が気になった。

現在の日本では、ボタンを押すと水が流れ、排泄物が下水道を通して処理されるのが一般的である。私が滞在していた都市部のホテルもボタン一つで水が流れた。しかし、都市部から離れた幼稚園のトイレはそのようなものではなく、和式の真ん中にある穴に排泄

物を落とすだけのトイレだった。いわゆる、汲み取り式のトイレであった。掃除も行き届いていないため、ハエが飛びたかり、かなりきつい臭いがしたことを今でも鮮明に記憶に残っている。そして、水で洗える手洗い設備も、石鹸もなかった。2020年時点で、屋外排泄をしている人の割合が世界人口の内4億9400万人いるという状況で、この幼稚園は個室のトイレを使用できるが、それだけでは十分ではないと思う。未だに改善されていない衛生施設を利用している人が6億1600万人もいる。この幼稚園のトイレがどのように排泄物を処理しているのかわからないが、考えられる方法は、汲み取りの車が来るか、新しい穴を掘るのか、薬で分解して土に返すかのどれかであろう。車が通行する道ではないため、土に返すという方法が一番考えられるが、どの方法であろうと衛生管理がされていないことには変わりはないだろう。また、スラム街を訪問した際に最初に気になったのは、どこにもトイレがないということだ。スラム街の住人に聞いたところ、「自分たちが暮らしている丘の上の一つある」ということであった。そして、一つしかないトイレを50家族もの人たちが共同で使っているようだ。いつもトイレには列ができていと聞いた。実際にトイレを見に行くことはなかったため、詳しく言及することはできないが、ジェリカンに水を汲んで家まで持ってくる子どもたちがいることから、水道が通っていないことがわかる。ここも汲み取り式のトイレを使用しているのであろう。

1) ICHINOSAWA Otoha

山野美容芸術短期大学

連絡先:〒192-0396 東京都八王子市鎌水 530

トイレは感染症や人々の健康に深く関わりのある設備である。つまり、不衛生なトイレを使用することは、感染症を発生するリスクや健康が侵されるリスクがあるということだ。

排泄物から発生した細菌で免疫力の低い子どもたちは下痢を引き起こし、5歳未満の子どもたちが年間約52万5000人も命を落としている。そのため、衛生設備の設置はもちろんのこと、衛生的でかつ安全なものであるべき衛生設備の設置、そして水道設備の改善から手洗い習慣の定着を地道に行っていく必要があると考える。

### III. ルワンダ人の仕事について

ルワンダの村やスラムで暮らす人々のほとんどが日雇いの仕事をしているという。固定職に就いている人はごく少数に限られている。日雇いの仕事は、畑仕事をしたり、荷物を運んだり様々だ。日雇いの仕事を見つける方法も人それぞれだが、ほとんどの人が知り合いの農家に行って、「今日、畑の仕事をさせてほしい」と直接お願いしに行く。その他の人たちはFacebookなどを利用して自分はこういうことができますという履歴書のようなものを貼り付けたり、友達から情報ももらって、仕事が欲しいと歩き回ったりして仕事を見つけているようだ。もちろん、お願いをしたからといって、すべての願望が通るわけではなく、断られることもたくさんあるそうだ。断られた日は収入を得ることができないため、何も食べられない一日を過ごすこともある。このコロナ禍の影響で日雇いの仕事ができず、コロナウイルスに感染して死んでしまう前に、飢餓で死んでしまうという声もルワンダから多くあったくらい、日雇いの仕事は不安定で一定の収益を得ることができないため、過酷な生活が強いられることになる。なぜ、こんなにも、固定職に就くことができる人が少ないのか。その理由は2つあると考える。一つは、教育に原因があると考えられる。2018年のデータによると小学校の就学率は98.6%とほぼ100%の子どもたちは学校に通うことができている。しかし、終了率は67%と約3割の子どもたちが卒業できていない状態にある。そして、高等教育の就学率はまだまだ低いのが現状だ。初等教育を受けられる状態であっても、卒業できない子どもたちがいる理由は、学費が無償であっても、勉強するために必要な文房具などに割くことができるお金がないからだと考えられる。幼稚園

園を訪問した際に、文房具が欲しいと子どもたちに言われた記憶が鮮明に残っている。都市から離れた幼稚園の周りには店舗と呼べるような施設は一つもなく、文房具を手に入れるためには都市部に出なければいけない状態である。そのため、彼らにとって高価で貴重な文房具は簡単に手に入るわけではなく、学習できる環境をあきらめざるを得ない状況なのだ。また、女性として生まれてきた子どもたちは生理の問題に毎月直面する。都市部ではスーパーに生理用品が豊富に並んでいるのに対して、都市部から少し離れるだけで生理用品を見なくなった。村で暮らしている女の子たちは、未だに葉っぱや木の枝などを生理用品代わりに使っているようだ。教育が全員に行き届いておらず、かつ性教育もしっかり行われていない学校がほとんどであるため、女の子たちは勉強できる環境をあきらめざるを得ない状況にある。教育が行き届かない、基礎知識がないため、就ける職にも限りが出てきてしまう。そして最終的に農業に頼ってしまったり、日雇いとしてでしか職を得ることができない状況に陥ってしまっているのではないかと考えられる。

もう一つは、職種が少ないことが原因だと考える。現在のルワンダでは、農業中心だった経済から知識基盤型経済への移行、つまり第一次産業から第三次産業へのシフトチェンジが目指されているが、仕事がないことが現実だ。今まで農業に頼ってきた分、サービス産業にシフトしようとしても職がないことが原因で、仕事を得る機会が減ってしまっていると考えられる。そのため、いくら質の高い教育を子どもたちに届けたところで、それを生かすことができる職業がないのだ。

「新しい仕事をつくり出す」ということに重きを置いて、新しい雇用を生み出していくことが重要なのではないかと考えられる。

### IV. ルワンダの食事について

ルワンダは都市部と農村部の貧富の差がかなり大きいと感じた。都市部には大きな建物がいくつも建っていて、お金を払えば食事をとることができる場所がある。そして、レストランやスーパーに置いてある食材の種類もかなり豊富である。アメリカンフードから、アジアンフードまで幅広い種類の食事が提供されており、スーパーにも魚、肉から野菜、スナック菓子まで置いてある。それに比べて、農村部では豆や青バナナ、じゃがいもを主食にしていることが多かった。

ローカルの幼稚園を訪問した際に出てきた食事は、主食が米、その上にトマトで味つけされた数種類の豆と青バナナ、デザートにバナナとツリートマトが出てきた。お皿いっぱい盛られた食事を小さな体で頬張る子どもたちの姿を何度も見た。大人の私でもお腹いっぱいになるほどの量だった。「なぜこんなにたくさんお皿に盛るのか」と理由を聞いたところ、家に帰ってからご飯を食べられる保証がないからだと言う。仕事について前述したように、日雇いの仕事をする人がほとんどなので、毎日安定した収入を得られるわけではない。つまり、食事に充てられるお金を確実に稼げる保証がないということだ。そのため、彼らは大盛りに盛られた食事を頬張って食べるのだ。残った食事は一つのカゴに入れられ、そのご飯を次は村の子どもたちが頬張って食べていた。

スラム街で食べた食事はポテトが主食、トマトと玉ねぎ、豆とドドという野菜と一緒に煮込んで食べる。彼らも、毎日ご飯を食べられる保証はなく、1日1食の生活がほとんどだそうだ。

最低食事基準を満たす子どもは全体の34%であった。そして、最低食事多様性基準を満たす子どもは22%であり、都市部が32%に対して農村部は19%と差が開いていることがわかる。世界飢餓指標では、2000年の49.3点という結果に対して、2021年では26.4点と継続的に改善は図られているが、未だに深刻な状態であることがわかる。

このような研究結果や私の経験から都市部と農村部を比べると、食事に対してかなり大きな格差があることがわかる。教育が行き届いていない、職が見つからない、お金を稼げない、食事ができない。このような負の連鎖が起こっているのではないかと私は考える。

そのため、食の改善を根本的な部分から改善するのならば、教育から見直すべきだと思う。



図1 ローカルの幼稚園の給食



図2 スラムでの食事



図3 村で売られている魚フライ



図4 首都キガリのアジア料理店の食事

※写真は筆者撮影

### V. ルワンダの衣服について

私が滞在していた首都キガリは観光客が多いため、都市に住んでいる人たちが着ている衣服について一概には言えないが、ほとんどの人がキテンゲというアフリカ布で作られた洋服やズボンとTシャツといった、ごく普通のサイズの合った綺麗な洋服を着ていた。そして、かなり暖かな気候ではあるが、トレンチコートを着たり、長袖のタートルネックを着たりと、それぞれがお洒落を楽しんでいるように感じた。このような都市部の人々に対して、村やスラムに住んでいる人たちは、サイズが合っておらずボロボロになった洋服や靴を着ていた。穴が空いていたり、泥で汚れていたり、お腹が出てしまうくらい小さなサイズだったり、手が隠れてしまって裾をひきずってしまうくらい大きなサイズだったり、都市部と農村部の差を目に見えて感じた瞬間であった。都市部では洋服を売っているショップがあり、キテンゲでつくられた洋服から私たち日本人が着るような普通の服までが売られていた。しかし、農村部で暮らす人々は農業に頼った自給自足の生活をしているため、新品の綺麗な洋服が売られているショップに出会う機会がほとんどない。稼いだお金を持ってたまに母親が街に洋服を買いに行くか、バスの中で街から洋服を行商に来ている人から買う、出稼ぎから村に帰ってくる際に買ってくるという方法でしか、新しい洋服を得ることができる機会が彼らにはないのだ。そのため、持っている洋服の数も多くはなく、毎日同じ洋服を着て生活することも珍しくない。彼らからは、洋服が欲しいとねだられることはなく、お金が欲しい、水が欲しいと言われることのほうが多かったが、サイズの合った新しい服が欲しいという思いを抱いている人がほとんどであろう。私がこの状況を目の当たりにして感じたことは、ただ衣服を寄付するだけでは偽善にすぎない行動であるということだ。確かに、彼らの中には洋服が欲しいと願っている人がいることは間違いないと思う。ただ、いつでも彼らに求められるのは、文房具、お金、水であった。ただ寄付するだけでは、本来あるべき支援の形ではないと思う。彼らが本当に欲しているものは何か、彼らの求めているものは何か、彼らの直接の声を聞く必要があると考える。衣服を寄付することも、お金を寄付することも、永続的にできることではない。そのため、問題や課題を根本から解決していく方法を考え、永続的な支援の方法を考えていく必要がある。



図6 都市に住む人々



図7 村に住む子どもたち



図8 村に住む子どもたち

## VI. 考察

ルワンダの経済成長は「アフリカの奇跡」とも呼ばれている。しかし、現実には都市部と農村部の貧富の差が顕著に現れており、特にローカルの生活には様々な課題があった。幼稚園や小学校で教育を受けることができる環境にあっても、継続的に通うことが難しいという問題に直面する現実。日雇いの仕事しかできない状況にあり、サービス産業の発達が遅れているがゆえに、職がなくて困っている現実。毎日栄養のあるご飯を食べることができるという保証がない現実。衛生的な衛生設備にアクセスすることが難しい現実。今回ルワンダのツアーに参加したことで、インターネットや本からは知ることのできなかつた現実を知ることができた。そして、今回見えてきた一つひとつの課題は、単体で存在しているのではなく、一つひとつの問題が根底でつながっているということを感じた。職を手にするためには教育を受ける必要がある、教育を受けるためには職が必要であるなど、すべての問題が根底でつながっているからこそ、課題解決をすることは容易ではないのだ。一つひとつの問題に対して、少しずつ着実に解決を目指していかなければ、現実を変えることはできないと考える。ただ、その取り組みの中で私たちが現地の人々の気持ちを勝手に汲み取って支援という形にするのは、エゴの行動にすぎない。そして、彼らが抱える問題を根本から解決する方法にはつながらないと考える。彼らが求めているものは何か、彼らが本当に必要としているものは何か、彼らの実際の声を聞き、自分の目で実際に見て、肌で感じ、そこから彼らが安定した生活を送るためのルールづくりのお手伝いをする、これが私たちに求められていることではないだろうか。

私はルワンダへの渡航を通じて、特に農村部に住む人々は都市部から離れている分、いろいろな情報を知ることができるプラットフォームがないように感じた。まだ未熟者で経験の乏しい私が今すぐ始められることは、そう多くはないと思う。しかし、私が美容を専門に学んでいることを武器にできることは自分で作り出せる、そう感じている。将来、美容を用いた新しいサービス産業の雇用を生み出すこと、そして貧困に苦しむ人々が安定した収入を持続的に得ることができる環境をつくることで、彼らが安定した生活ができるような環境の土台づくりをしたい。

## 文献

- 1) 外務省 「世界の医療事情」  
[https://www.mofa.go.jp/mofaj/ms/h\\_w/page5\\_000386.htm](https://www.mofa.go.jp/mofaj/ms/h_w/page5_000386.htm)  
(2022/11/9)
- 2) 外務省 「世界の学校を見てみよう！」  
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/kids/kuni/rwanda.html>  
(2022/11/10)
- 3) Norihiero415 「小学生就学率ほぼ100%！ルワンダの教育の現状と課題」  
<https://rwandanote.com/2020/05/15/education/> (2022/11/20)
- 4) UNICEF 「ユニセフの主な活動分野 水と衛生」  
[https://www.unicef.or.jp/about\\_unicef/about\\_act01\\_03\\_sanitation.html](https://www.unicef.or.jp/about_unicef/about_act01_03_sanitation.html)  
(2022/11/27)
- 5) JICA 「栄養プロファイル ルワンダ」  
[https://www.jica.go.jp/activities/issues/nutrition/ku57pq00001pa078-att/nutrition\\_profile\\_rwanda.pdf](https://www.jica.go.jp/activities/issues/nutrition/ku57pq00001pa078-att/nutrition_profile_rwanda.pdf)  
(2022/11/29)
- 6) JICA 「トイレ革命で、綺麗な生活、美味しいアフリカ」  
[https://www.jica.go.jp/africahiroba/2017\\_TICAD/vol2\\_6/index.html](https://www.jica.go.jp/africahiroba/2017_TICAD/vol2_6/index.html) (2022/11/30)
- 7) 庄ゆた夏 「ルワンダ、ルリンド郡マソロ村ートイレから考える国際協力」  
[https://www.biz-lixil.com/column/urban\\_development/pt\\_report024/](https://www.biz-lixil.com/column/urban_development/pt_report024/) (2022/11/30)
- 8) 外務 「ルワンダ国別評価（第三者評価）」  
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/files/100184000.pdf>  
(2022/11/30)
- 9) 大江里佳 「働くという事。仕事という概念。」  
<https://www.newsweekjapan.jp/worldvoice/ooe/2020/09/post-4.php> (2022/11/30)
- 10) 千葉貴子、佐藤裕美、デュアーアンドリュウ 「ルワンダの子どもの食生活習慣が健康に及ぼす影響」  
[https://www.istage.ist.go.jp/article/kasei/61/0/61\\_0\\_137/article-char/ja/](https://www.istage.ist.go.jp/article/kasei/61/0/61_0_137/article-char/ja/) (2022/11/30)

提出日：2022/12/15